



健康と競技の心理

Psychology of Health & Sport

◇ 特集 九州スポーツ心理学会 第 30 回大会を迎えて	1
◇ 特集 九州スポーツ心理学会 第 29 回を振り返って	5
◇ 「こころトピック」	7
◇ 連載 「みなさん！読んでみてください」	8
◇ 連載 研究タマゴ	9
◇ お知らせ	
九州スポーツ心理学会からのお知らせ	10
九州スポーツ心理学会役員・事務局スタッフ	13
編集後記	14

特 集

九州スポーツ心理学会第 30 回大会を迎えて

九州スポーツ心理学会第 30 回大会
2017 年 3 月 4, 5 日 アクロス福岡開催

『 私を育てた九州の仲間たち 』

徳永 幹雄（九州大学名誉教授
九州スポーツ心理学会 顧問）

30 年前は何をしていたのだろうか。年齢は 40 代後半で、アメリカ留学から帰り、やる気満々といったところかな？ あまり覚えていないで、ほどほどに読んでください。

確か第 1 回目は、福岡市の六本松にあった九大教養部の小さな会議室で、数人が集まって、研究会をはじめたのを記憶しています。

あれから 30 年経ってしまったのか。今思えば、あまりに年を取りすぎ（遠くにきた）たもんだ。原稿を依頼されたので、年老いた元教授が 30 回大会までの自分を振り返ってみたい。

1. 教育・研究を振り返る

昭和 37 年（1961）に九州大学に運よく就職した。それから、平成 14 年（2001）に退職するまで 41 年間、勤務することになる。なんと長い年月、飽きもせず、勤めたもんだ。退職後、第一福祉大学に誘われ、改称された福岡医療福祉大学を平成 26 年（2014）に退職するまで、53 年間になる。こんなに長く、一体何を教えてきたのだろうか？ 体を動かすことの意味を、どれだけ学生に教えられたのだろうか。

研究について、思いつくまま。

「最初は教授に言われるとおりにやった」「何が問題かを考え、自分なりの新たなテーマを設定した」「3～5 年間でまとめる（最低 3 年間は同一テーマで学会発表をする）」 「主な研究テーマは態度変容、態度と行動との関係、健康度診断検査、スポーツ選手の精神力の診断とトレーニング」など、そして、最後は「メンタルな動き直せば、心は変わる」で終わった。

2. 学会活動を振り返る

長い間、学会に関係してきたので、九州スポーツ心理学会（理事、副会長、会長）や日本スポーツ心理学会（理事、副会長、会長）の役職を務めることができた。スポーツメンタルトレーニング指導士の資格養成制度や指導士会の立ち上げは、私が体育教師になった時からの夢でもあった。その意味で、今は何も思い残すことはない。いつも心掛けたこと。

「学会に参加する。そして、学会に行くなら、必ず発表をする（学会に参加しない、年に数回か研究発表をしない先生は、大学の先生ではない）」「学会事務局や大会事務局の仕事をせっせとコツコツやる」「学会にはテニスラケットを常に持参する」「総会には必ず出席する（総会に残らないのは一人前の研究者ではない）」「懇親会（情報交換会）には必ず出席する」「関東・関西の先生方に負けるな」などと言ってきたもんです。

3. 九州スポーツ心理学会の魅力

30 回大会を振り返ると、何ととっても、これまでの私を育ててくれたのは、九州である。九州には多くの仲間がいた。仲間をつくり、私を支えてくれた。岩崎先生、そして、佐久本・山本・橋本の各先生に助けられた。秦泉寺・山内先生も最初からの仲間である。

そして、国内・国外の学会では、常に橋本先生がいた。ラケットを持って、あちこちの学会に参加したもんです。非常に感謝しています。

先輩や仲間たちは、既に引退している。現在は福大に山口先生、九大に杉山先生、鹿屋に森先生が来られ、磯貝・伊藤・兄井・下園・今村先生らが育ち、そして次の若手も育っている。やっぱり、学会を立ち上げて良かった。後輩たちよ、大いにはばたけ!!

蛇足ながら、最後は製作中のスポーツ彫刻です。ご覧ください。



喜びと悲しみの琴閏、高さ100cm、桐木、未完成

特 集

九州スポーツ心理学会第 30 回大会を迎えて

『 学会のこれまでとこれから 』

磯貝浩久 （九州工業大学
九州スポーツ心理学会会長）

今年、九州スポーツ心理学会は 30 周年を迎えます。振り返れば、長かったようにも思いますし、あっという間だったようにも思います。発足当初は、九州体育学会第二分科会の一部のような位置づけで、九州スポーツ心理研究会として活動しておりました。参加者も大学教員を中心に 10 名程度でした。その後、学会に名称を変更して、理事会組織も整備し、着実に発展を遂げてきたように思います。近年は、発表演題数が 30 演題前後をキープしており、参加者も 100 名弱となっています。また学会企画も年々も魅力的になってきています。

本学会の発展には、スポーツ指導現場を強く意識した学会のスタンスや、参加者同士のコミュニケーションが取りやすいといったアットホームな雰囲気などがあると思います。また、学会をリードしてきた先生方のお力が大きかったように思います。特に、初代会長の佐久本稔先生、初代副会長の岩崎健一先生、二代目会長の徳永幹雄先生、三代目会長の山本勝昭先生、四代目会長の橋本公雄先生のご功績は大きく、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

今後の学会に関して、いくつかの方向性をお示ししたいと思います。まず、学会大会の発展があげられます。参加者の増加も重要ですが、より魅力的な企画をしていくことが大切だと思います。日本スポーツ心理学会を除く唯一のスポーツ心理学に関する学会であり、小回りのきく学会ですので、そのことを活かしながら企画を考えて行く必要があると思います。そのことにより、九州エリアだけでなく、全国からスポーツ心理学関係者に参加してもらえないかと思います。また、現場の指導者や他分野の研究者にも参加してもらえそうな学会にできたらと考えております。

また今後の課題として、学会機関誌の工夫があると思います。これまでも議論を繰り返してきましたが、査読付きの論文を掲載する、九州の冠をとるといったことをいま一度真剣に考えてみるのも良いと思っています。その他にも、学会主催のセミナーの開催なども検討して行ければと思います。

皆様のお知恵を借りながら、より魅力的な学会にしていきたいと思いますので、ご協力よろしく申し上げます。

特 集

九州スポーツ心理学会第 30 回大会を迎えて

『 第 30 回記念大会に寄せて 』

伊藤 友記 (九州共立大学
九州スポーツ心理学会理事長)

「九州スポーツ心理学会」が発足して 30 年、孔子の言葉を借りるならば、本学会も而立（三十にして立つ）の歳となりました。第 1 回大会は「九州スポーツ心理学会研究会」として開催され、徳永先生の「研究会発足について」というお話を含め 9 演題からのスタートでした。当時の研究発表者のお名前を拝見すると、その後の九州のスポーツ心理学会（界）の発展に寄与され支えてこられた先生方ばかりです。（※学会 HP に歴代大会の記録が残されています）

当時の先生方が「研究会」として起ち上げた会は、今や九州ばかりでなく遠く関西や関東からも参加者が集い、2 日間の開催、30 演題を超える発表や企画が催される立派な「学会」へと発展してきました。今回の記念大会では、歴代会長・副会長の先生方のリレー講演も企画されています。先生方が、今や 30 歳を迎える「我が子」をどのように育てこられたのか、そしてこれからどのような期待を寄せておられるのか、起ち上げの経緯や運営のご苦労話など、盛り沢山のお話をお聞きできることが楽しみでなりません。

また今回の大会テーマは「スポーツ心理学の魅力と面白さ」です。学会が発展し、領域に関心を抱く人が増えるほど、そこで扱われる内容も多岐に渡ります。そこでは、ともすれば領域の細分化や専門化が進み、同じ「スポーツ心理学」（の領域）に身を置きながら、お隣のしていることがわからなかったり、関心を抱けなかったりといった事態が生じる危険性も孕んでいます。しかしこの「九州スポーツ心理学会」は、発展を遂げてきながらも適度な人数規模（100 名強程度）が保たれているということが、実はその大きな魅力ではないでしょうか。即ち、お隣の研究も覗いてみようという気になる、アットホームな雰囲気を持った学会だと思うのです。それは、本学会発足当初の先生方が、膝を突き合わせて互いの関心事を面白がって議論するといった雰囲気が脈々と受け継がれているからではないか、と勝手ながら推測しています。今大会においても温かい雰囲気の中で、改めて「スポーツ心理学の魅力と面白さ」を味わうことができればと思っております。

多くの会員の皆様に支えられ、記念すべき第 30 回大会を迎えられたことを慶ぶとともに、今後ますますの学会の発展を祈念し、記念大会に寄せる言葉とさせていただきます。

特 集

九州スポーツ心理学会第 29 回を振り返って

九州スポーツ心理学会第 29 回大会が下記において開催されました。

日 時 平成 28 年 3 月 5 日 (土)・6 日 (日)

会 場 福岡県北九州市小倉北区堺町 1-6-13 パークサイドビル(小倉)

大会テーマ： 『自己（セルフ）再考』

特別企画 フリースタイル・グループディスカッション
 「熟達と運動学習の観点から」
 「社会との関係の観点から」
 「健康行動の観点から」
 「ダイバーシティの観点から」

学生企画 「現場に活かすロジカルコミュニケーションスキル」

特別講演 「自己調整学習理論とスポーツにおけるパフォーマンスの向上」

ポスター発表

第 28 回九州スポーツ心理学会報告

九州スポーツ心理学会第 29 回大会に参加して

参加学会：九州スポーツ心理学会 29 回大会
日時・開催地：2016 年 3 月 5, 6 日パークサイドビル（小倉）

水崎 佑毅（福岡大学）

第 29 回目となる今回の大会は、北九州市小倉にあるパークサイドビルで開催されました。大会テーマは「自己再考」。このテーマには「様々な観点から改めて自己について語り合いましょう」という意味が込められています。また「再考」を別の漢字に変えると違った意味にもなり、私にとって非常に印象的なテーマでありました。

今大会の中で、特に「自己」について考えるきっかけとなったのは、1 日目のフリースタイル・グループディスカッションでした。このセッションでは、【自己（セルフ）について語ろう】をテーマに、4 の観点でグループに分かれ、各々でディスカッションを行いました。私は、中本浩揮先生（鹿屋体育大学）がモデレーターを務める「熟達と運動学習の観点から」に参加しました。このグループでは、スポーツ現場で生じる指導の現場的な感覚と心理学理論の乖離をどのように扱うかについて、それぞれの立場から議論をしました。私は、心理学の立場に立ち、心理学の理論から明らかにされている自主練習や自己決定・自己選択など、「自己」への重要性について意見を述べ、スポーツ現場の立場に立つ先生方からは、「自己」への重要性は理解しているが、選手に教え込む指導者主導型の練習の方が効率的であると意見を頂くことができました。この意見を受けて自分の過去を振り返ると、確かに自分で考えて行動するよりも、指導者に言われて行動することが多かったことを思い出しました。しかし、今その指導を受けてきて思うことは、誰かに言われて行動することは、「自分の為」の行動というよりは、「人の為」の行動になっていたということです。結果的に、両立場の意見をまとめることは非常に困難ではありますが、この乖離を埋めていくために「私ができることは何か？」と考えさせられるセッションでありました。

今大会を通じて、「自己」を見つめる重要性を改めて感じることができました。ユングが提唱した心の構造では、「自己」は無意識の中に存在しています。何事も意識的に行動するより、無意識的に行動する方が「自分らしい」と言えます。「自分らしさ」が何かを知るためにも、「自己」との関わりをもっと多く増やしていこうと思います。

最後になりますが、2 日間の大会を準備された伊藤友記先生（九州共立大学）をはじめ、事務局スタッフの方々に厚く御礼申し上げます。

連載

こころトピック

第 4 回 オリンピック・パラリンピック 2020 とスポーツマンシップ

兄井 彰（福岡教育大学）

現在、幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂作業が行われ、平成 30 年度から随時、新学習指導要領に移行される。この改訂の体育・保健体育においては、生涯にわたる心身の健康の保持増進や豊かなスポーツライフの実現を重視する方針が堅持され、オリンピック・パラリンピックに関連したフェアなプレイを大切にするなどスポーツの意義の理解が新しく加えられている。このことから東京で開催されるオリンピック・パラリンピック 2020 を転機として、体育・スポーツの在り方も変わりつつあり、スポーツ・運動の意義やフェアプレイといったスポーツマンシップの大切さが強調されつつある。

しかし、スポーツや運動に関する現状は、体罰やプロ野球の賭博、ドーピングなどスポーツ倫理にまつわる問題が数多く見受けられる。本来、スポーツとは、国際体育・スポーツ評議会の「スポーツ宣言」にある通り、①プレイ（遊戯）の性格を有し、自己との、あるいは他者との、または自然とのたたかひを含むところの、いかなる身体活動もスポーツである。②その活動が、競争を含むものである場合には、常にスポーツマンシップに則って行なわれなければならない。フェアプレイの理想（念）を欠いては真のスポーツはありえない（島崎，1982）である。スポーツでは、プレイ（遊び）という側面が強く、スポーツマンシップやフェアプレイに支えられ、みんなが楽しくスポーツを行うために、プレーヤー同士も、コーチも、審判も、観客も、スポーツに関わる全ての人々が、互いに尊重しあい、より良くあるという Win-Win の関係を築くことが大切だと考えられている。しかし、実際には、どちらかが良くて、どちらかが悪いと言った関係が成立してしまいがちである。それを乗り越え、スポーツや運動を心から楽しみ、互いに良かったと思えるための知恵として、スポーツマンシップが考案された。

このスポーツマンシップという考え方は、スポーツの技術やメンタルの指導、サポートに携わる人々にとって、大変重要である。しかし、心理的な側面からのスポーツマンシップやフェアプレイの検討が進んでいないのが現状であろう。スポーツマンシップやフェアプレイの精神をどのように学び、身につけ、浸透している（いく）のかについて、心理的な側面から検討し、よりよいスポーツ・運動との関わり方が明らかにされることが望まれる。数年後に迫ったオリンピック・パラリンピック 2020 をきっかけとして、どのように、スポーツや運動と向き合うかについて、それぞれの人々がより深く考えることにより、日本のスポーツや運動文化がさらに発展していくのではないかと思われる。

島崎仁（1982）スポーツと人間。大教スポーツ研究会編，スポーツ人間。学術図書出版，pp. 5-6.

連 載

最近読んだ面白い研究または書籍を先生方にご紹介していただきます。

「みなさん！読んでみてください」

『Evidence for Dual Mechanisms of Action Prediction
Dependent on Acquired Visual-Motor Experiences』

Mulligan D, Lohse KR, Hodges NJ. J Exp Psychol Hum Percept Perform. 2016
42(10):1615-1626.

中本 浩揮（鹿屋体育大学）

スポーツにおいて予測能力は古くから重要な能力とされてきました。その主な理由は、我々の生体が神経伝達に少なくとも数十ミリ秒を要することに起因します。例えば、テニスボールを打つ場合、網膜上でボールを捉えてから視覚処理に関連する脳の領域（視覚野）に信号が届くまで 30 ミリ秒程度かかるとされています。この間にボールは 2~3m 進むことになります。そのため、現在の感覚情報を基に運動していたのでは、ラケットにボールを当てることすらできません。よって、優れたパフォーマンスを発揮するためには、少し未来の情報を予測して運動をコントロールする必要があります。熟練選手は優れた予測能力を持っています。具体的には、相手サーバーが打球する前の動作のわずかな違い（視覚的予測手がかり）を見分けて、将来的なボールの到達位置・時間を予測する力を発達させています。そのため、動きの違いを見分ける「視覚的な経験」を多く積むことで予測能力は高めることができる、というのがこれまでの定説でした。

今回紹介する論文は、この定説とは全く異なるメカニズムによって熟練者が予測している可能性があることを実験心理学的に示した論文です。結論を大雑把に述べると、予測能力は、視覚経験ではなく、運動経験によって獲得されるということです。この実験では、実験参加者にダーツを投げるモデルの動作だけを観察させ、将来的にボードのどこにダーツが刺さるかを予測させます。このような予測テストを行った後、視覚経験群は、異なる位置にダーツを投げるモデルを観察し、動作の違いを視覚的に学習します。一方、運動経験群は他者の動作は観察せずに、自分自身がダーツを投げる練習をします。その後、予測テストを行ったところ両群とも予測能力が向上しました。さらに彼らの実験では、他者のダーツ動作を観察中に、参加者にダーツを投げる方の手に力を入れる条件、逆側の手に力を入れる条件の 2 条件で予測テストを行わせます。その結果、運動経験群だけが、ダーツを投げる方の手に力を入れた場合に予測ができなくなってしまいました。実はこの予測の低下の特徴は同年に発表された彼らの研究で熟練者だけが示す反応です。この結果が意味することは、熟練者は他者の行為を予測するときに、自分自身があたかも運動を行うかのように脳内で体験し将来の予測を行っているということです。そして、この能力は、運動経験によってしか獲得できないということです。見る経験が運動学習を促進する観察学習と同様に、する経験が知覚学習を促進するという知見は、我々の脳では知覚→運動といった一方向に向かって分担作業を行っているのではなく、両者は知覚⇄運動といった双方向に共同作業していることを強く示します。この研究は、知覚と運動を切り離れた実験的な研究をいくらしても熟練選手の特徴には近づけないことを明示しているかもしれません。

連載

新たなステージを求め、研究の第 1 歩を踏み出した方々をリレー形式でご紹介！

「研究タマゴ」

守田 有希 (福岡大学大学院)

古門 良亮 (九州工業大学大学院)

前回、「研究タマゴ」を書かれた守田有希さん（福岡大学大学院）から襷を受け取りました、九州工業大学大学院博士後期課程の古門良亮です。私の指導教官である九州工業大学の磯貝浩久先生には学部生の時からご指導を賜っており、今年で研究室に入って 5 年目となります。私は、サッカーを 16 年続けていますが、現場ではしばしば「状況判断」という言葉が使われています。この「状況判断」とはどのような過程で習得され、熟練者と非熟練者は何が違うのかということを疑問に持ち、研究をスタートしました。学部生の時は九州スポーツ心理学会で、サッカー選手の専門的知覚とプレー記憶の関連性についてポスター発表をさせていただき、その際に眼という感覚器から情報を取り入れる方略が熟練者と非熟練者で異なるのではないかというご指摘を頂きました。そこで、視覚探索方略に着目し、大学院生の時には、7th Asian South Pacific Association of Sport Psychology International Congress (ASPASP) や九州スポーツ心理学会などで、Multiple Object Tracking Task を軸としたサッカー版 MOT 課題作成や視覚探索方略の検討を行い、ポスター発表をさせていただきました。様々な方のポスター発表や口頭発表を学会という場で拝見させていただくことや、自分が知らない観点からのご指摘やご質問を頂くことで、” 次の研究はこの部分を改善しよう” と思いますし、モチベーションの維持にも繋がります。

2016 年の 10 月に九州工業大学の博士後期課程に入学し、現在は日々研究活動や専門分野の勉強に取り組んでいます。これまで私が研究を続けてこられたのは、多くの企業の方や先輩方、そして何よりも指導教官である磯貝先生のご指導を頂いた賜物であると感じております。

将来は、研究の楽しさを伝えることができるような大学の教員になりたいと思っています。私はまだまだ未熟な部分がありますが、「スポーツ現場への還元」という思いを念頭において今後もより良い研究ができるよう日々精進したいと思っています。

*執筆者の所属は、執筆当時のものです。ご了承ください。

佐久間智央 (九州工業大学大学院)

大石彩加 (九州大学大学院)

森原悟一 (九州工業大学大学院)
松田陽二 (福岡大学大学院)

学会からのお知らせ

《 九州スポーツ心理学会の紹介 》

沿 革

本学会は、第 1 回が昭和 63 年 3 月に開催され、九州スポーツ心理学研究会として発足しました。第 6 回大会（平成 5 年）より九州スポーツ心理学会と改称し、学会としての組織化が行われています。

目 的

本学会は、運動・スポーツ心理学における研究と介入を促進することを目的としています。事業として、運動・スポーツに関する心理学的研究とその応用に関心ある人々のために年 1 回の学会大会を開催し、情報交換および交流の場を提供しています。

会員のメリット

1. 健康・スポーツ心理学に関するさまざまな情報が得られます。
2. 年 1 回の学会大会の案内が送付されます。
3. 「九州スポーツ心理学研究」が送付されます。
4. 健康運動指導士の公衆ポイントが得られます。
5. 日本スポーツ心理学会「資格認定スポーツメンタルトレーニング指導士」の研修ポイントが得られます。

《 学会入会希望の方へ 》

入会をご希望の方は下記の項目を記入の上、事務局まで郵送または E-mail にてご連絡ください。

1. 氏 名
2. 所属機関
3. 連絡先（勤務先・自宅）
4. 電話番号（勤務先・自宅）
5. FAX 番号（勤務先・自宅）
6. E-mail

連絡先 〒807-8585 北九州市八幡西区自由ヶ丘 1-8

九州共立大学スポーツ学部 伊藤研究室

九州スポーツ心理学会事務局 宛

TEL : 093-693-3310

E-mail : kssp@kyukyo-u.ac.jp

九州スポーツ心理学会 第 30 回記念大会開催!

大会テーマ「スポーツ心理学の魅力と面白さ」

平成 29 年 3 月 4 日・5 日 アクロス福岡

【日時】 1 日目：平成 29 年 3 月 4 日（土） 受付 13：00～
2 日目：平成 29 年 3 月 5 日（日） 受付 8：30～

【会場】 アクロス福岡大会議室 7 F
福岡市中央区天神 1 丁目 1-1
(地下鉄空港線天神駅から徒歩 3 分 (16 番出口))

【参加費】 会員¥3,000 当日会員及び学生会員¥2,000

【3 月 5 日（土）】

12：00～13：00 理事会（7 F 会議室 702）

13：00～ 受付（7 F 大会議室）

13：55～14：00 会長挨拶 会長 磯貝浩久（九州工業大学）

14：00～16：00 特別リレー講演（7 F 大会議室）

テーマ：九州スポーツ心理学会の魅力語る

演者：佐久本 稔・岩崎健一・徳永幹雄・山本勝昭・橋本公雄

司会：磯貝浩久

16：10～17：40 レクチャー（7 F 大会議室）

テーマ：自律訓練法&マインドフルネス（仮）

演者：坂入洋右（筑波大学）

司会：内田若希（九州大学）

17：45～18：20 総会

19：00～21：00 情報交換会（会場の近くで開催する予定です）

【3月6日(日)】

8:30~9:00 受付(7F 大会議室)

9:00~10:00 企画リレー講演(7F 大会議室)

テーマ: スポーツ心理学の面白さを語る(仮)

演者: 荒井久仁子(医療法人社団寿量会熊本機能病院)

上地広昭(山口大学)・山津幸司(佐賀大学)

司会: 水落文夫(日本大学)

10:10~12:10 特別企画 フリースタイル・グループディスカッション
(7F 大会議室)

テーマ: スポーツ心理学研究の面白さを探る

モデレーターとセッションテーマ(変更になる場合があります)

①上野雄己(日本学術振興会特別研究員 PD) & 山崎将幸(東亜大学): レジリエンス研究

②池本雄基(九州大学大学院) & 伊藤豊彦(島根大学)
: 動機づけ研究③元嶋菜美香(長崎国際大学) & 伊藤友記(九州共立大学)
: 気分・感情研究④幾留沙智(鹿屋体育大学) & 山内正毅(長崎大学)
: 運動学習研究

総合司会: 杉山佳生(九州大学)

12:10~13:00 昼食・ポスター掲示

13:00~14:50 ポスター発表(7F 大会議室)



【会場案内】

博多からのアクセス・地下鉄: 博多駅~天神駅まで約5分、16番出口より徒歩3分・西鉄バス: 「博多駅交通センター1F」または「博多駅前A」乗り場から乗車、「市役所北口」下車すぐ天神からのアクセス・福岡空港から天神まで地下鉄空港線で11分・JR博多駅~天神まで地下鉄空港線で5分・西鉄福岡天神駅から徒歩10分・地下鉄空港線天神駅から徒歩3分(16番出口)・地下鉄七隈線天神南駅5番出口から徒歩3分・バス停「市役所北口」から徒歩0分・バス停「天神4丁目」から徒歩3分・バス停「中央郵便局」から徒歩5分

九州スポーツ心理学会役員・事務局スタッフ

役員（平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月）

会長	磯貝 浩久（九州工業大学）
副会長	杉山 佳生（九州大学）
理事長	伊藤 友記（九州共立大学）
顧問（前会長）：	徳永 幹雄（福岡医療福祉大学） 佐久本 稔（福岡女子大学名誉教授） 山本 勝昭（福岡大学名誉教授） 橋本 公雄（熊本学園大学）
理事：	兄井 彰（福岡教育大学） 岩崎 健一（熊本健康・体力づくりセンター） 荒井 久仁子（熊本健康・体力づくりセンター） 秦泉寺 尚（宮崎大学） 山内 正毅（長崎大学） 森 司朗（鹿屋体育大学） 山口 幸生（福岡大学） 和多野 大（沖縄工業高等専門学校） 山津 幸司（佐賀大学） 上地 広昭（山口大学） 下園 博信（福岡大学） 内田 若希（九州大学）
広報担当理事	今村 律子（九州工業大学）
会計担当理事	兄井 彰（福岡教育大学）
監事	長野 史尚（九州共立大学） 秋山 大輔（日本経済大学）

事務局スタッフ（平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月）

総括	伊藤 友記
会計	兄井 彰
編集	萩原 悟一（日本経済大学）

各種委員会委員（平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月）

企画委員会	磯貝浩久 山口幸生 兄井彰 杉山佳生 伊藤友記 内田若希 中本浩樹
広報委員会	今村律子 山崎将幸（東亜大学） 水落文夫（日本大学） 下園博信
HP 担当	福岡大学

編集後記

九州スポーツ心理学会会報「健康と競技の心理 (Psychology of Health & Sport)」第 21 号をお届けいたします。今回、「九州スポーツ心理学会 第 30 回大会を迎えて」を特集にあげるにあたり、九州スポーツ心理学会抄録を全巻眺めてみました。そして、手にとった第 1 巻。表紙を開くと、そこには、本誌 (21 巻) の巻頭に寄稿いただきました徳永先生の「発足宣言」がありました。その一部をご紹介します。

本研究会はいうまでもなく、九州地区の研究者に研究発表の場を提供し、意見の交換を行うと共に、最新の情報、そして、身近な問題を語り、各位の研究と教育の発展に寄与することを願って発足されたものです。(中略) 鹿児島、宮崎、熊本、長崎、そして福岡から、15名の有志が集まりました。…

(第 1 回九州スポーツ心理学研究会抄録 創刊号に寄せて より一抜粋)

まさに、歴史の 1 ページ目が記されていました。15 名からスタートした本学会は、会員数も 122 名 (平成 29 年 2 月現在) となり、記念すべき 30 回大会を福岡で迎えます。年々若いチカラも加わり、九州パワーは、国内に限らず世界へ向かっていくでしょう。しかし、そこにはこれまで学会を築き上げてこられた先生方の九州地熱があり、きっとその熱い思いが引き継がれている証拠なのだと感じています。そして、記念すべき 30 回大会でも、その情熱を味わっていただきたく、たくさんの方の皆さまの御参加を心からお待ちしております。

最後になりましたが、お忙しい中、快く本ニュースレターの御執筆を頂きました先生方および大学院生の皆様、誠にありがとうございました。皆様方に厚く御礼、申し上げますとともに、今後ともよろしくお願い致します。

編集担当 今村律子



第 1～3 回九州スポーツ心理学研究会抄録

(第 1 回は、昭和 63 年発行)

平成 29 年 3 月 発行
九州スポーツ心理学会会報第 21 号
「健康と競技の心理」
Psychology of Health & Sport
広報・編集担当
今村律子 山崎将幸 水落文夫 下園博信

* 当記載すべての無断転載・引用等は固くお断りします